
 一般論文

10年前と現在の小学生の体力・運動能力の比較（第3報）

－6～11歳児童の総合評価の分析－

Comparison of Physical Fitness and Exercise Capacity of Primary School Students
in 10 years Before and Present (3)

－Analysis of Comprehensive Evaluation of Children aged 6 to 11－

河井克正、澤田孝二

Katsumasa KAWAI, Koji SAWADA

概要

10年前と現在の小学生（6～11歳）の体力・運動能力の分析を通して以下のことが明らかになった。

6～11歳のすべての年齢段階で男女とも、10年前に比べて現在のほうが、総合評価がA・Bと高い傾向にある者の比率が高く、逆に総合評価がD・Eと低い傾向にある者の比率は低い傾向にあった。

総合評価の平均値においても、6～11歳のすべての年齢段階で男女とも10年前に比べて現在の児童のほうが高い傾向にあった。

児童の体力・運動能力が向上の背景には、学校内での運動時間の確保、様々な種類の運動への挑戦、地域での運動に関わる活動の奨励など、児童の運動能力の低下に歯止めをかけ、体力や運動能力の向上を目指した学校内外での様々な取り組みの成果が出てきているのではないかと考えられた。

キーワード：小学生、体力・運動能力、10年前、現在

1. はじめに

子どもの数の減少、電子ゲームなどの普及、塾や習い事の増加、公園等での不審者の出没などの子どもを取り巻く環境の変化の影響もあってか、昔に比べて子どもが集団で外遊びをする姿を見かけることがめっきり少なくなったような今日この頃であるが、屋外で思い切り体を動かして遊ぶ機会の減少は、子どもの心身の健全な発達を妨げ、体力や運動能力の低下をもたらす大きな要因になってしまう可能性がある。

一方で、このような子どもの体力や運動能力の低下に歯止めをかけ、健全な心身の発育発達を目指して、学校や地域での健康増進の取り組みも全

国各地で実施されるようになってきている。

筆者らは、このような今日子ども達を取り巻く遊びの環境の変化により、今でも子ども達の体力や運動能力の低下が続いているのかどうか、また全国各地で行われるようになってきている学校や地域での子どもの体力・運動能力向上のための取り組みの成果が出てきているのかどうかを明らかにするために、文部科学省が実施した全国の小学生の運動能力調査の結果を分析し、10年前と現在で結果に違いがないかどうかを比較した。第1報¹⁾では6～8歳児童の調査結果を分析してその概要を報告し、第2報²⁾では9～11歳児童の調査結果を分析してその概要を報告した。第3報においては、6～11歳児童の体力・運動能力の総合評

価に着目し、10年前と現在の児童の総合評価の分布、総合評価の平均値に違いがないかどうかを分析し、その概要を報告することにした。

2. 方法

平成17年度および平成27年度に文部科学省が実施した全国47都道府県の体力・運動能力調査の集計結果のうち、スポーツ庁健康スポーツ課が作成した年齢別統計数値表³⁾に掲載されている小学生（6～11歳）の結果を分析した。標本数は、測定項目により違いがみられるが、両年度とも各年齢・男女それぞれ1000名前後となっている。

測定項目は、握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走、立ち幅とび、ソフトボール投げであり、各項目の測定値、全項目の合計点については、年齢別、男女別に平均値と標準偏差が、総合評価については、A・B・C・D・Eの5段階で年齢別、男女別にその比率が算出されている。

分析は、平成17年度と平成27年度の調査結果について行い、10年前と現在で体力・運動能力の総合評価の分布⁴⁾や平均値⁵⁾に違いがないかどうかを調べた。

3. 結果と考察

(1) 10年前と現在の6～11歳男子児童の体力・運動能力の総合評価の比較

① 6歳男子の総合評価の比較

10年前と現在の6歳男子の総合評価の分布をみると、10年前はAが6.4%、Bが24.6%、Cが40.3%、Dが19.4%、Eが9.4%であった。一方、現在はAが11.7%、Bが30.5%、Cが36.9%、Dが16.2%、Eが4.8%であった。（表1、表2、図1を参照）

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が31.0%、現在が42.2%であり、現在のほうが総合評価の高い者の比率が高かった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が28.8%、現在が21.0%であり、10年前のほうが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 2.99 ± 1.03 点、現在が 3.28 ± 1.02 点であり、現在

の児童の平均値が高かった。（表5、表6を参照）

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第1報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走の記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、柔軟性、敏捷性、全身持久性の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

② 7歳男子の総合評価の比較

10年前と現在の7歳男子の総合評価の分布をみると、10年前はAが7.6%、Bが24.1%、Cが36.5%、Dが26.1%、Eが5.8%であった。一方、現在はAが10.0%、Bが23.0%、Cが40.7%、Dが22.1%、Eが4.1%であった。（表1、表2、図2を参照）

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が31.7%、現在が31.9%であり、10年前と現在で総合評価の高い者の比率はほぼ同率であった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が31.9%、現在が26.2%であり、10年前のほうが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 3.02 ± 1.02 点、現在が 3.13 ± 1.00 点であり、現在の児童の平均値が高かった。（表5、表6を参照）

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第1報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルランの記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、柔軟性、敏捷性、全身持久性の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

③ 8歳男子の総合評価の比較

10年前と現在の8歳男子の総合評価の分布をみると、10年前はAが10.9%、Bが25.0%、Cが37.3%、Dが21.9%、Eが5.0%であった。一方、現在はAが15.8%、Bが31.5%、Cが33.7%、Dが15.1%、Eが4.0%であった。（表1、表2、図3を参照）

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が35.9%、現在が47.3%であり、現在のほうが総合評価の高い者の比率が高かった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が26.9%、現在が19.1%であり、10年前のほ

うが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 3.15 ± 1.04 点、現在が 3.40 ± 1.05 点であり、現在の児童の平均値が高かった。(表5、表6を参照)

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第1報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走の記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、柔軟性、敏捷性、全身持久性、スピード・走能力の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

④9歳男子の総合評価の比較

10年前と現在の9歳男子の総合評価の分布をみると、10年前はAが11.7%、Bが27.7%、Cが33.9%、Dが20.5%、Eが6.2%であった。一方、現在はAが15.0%、Bが30.4%、Cが31.0%、Dが18.1%、Eが5.5%であった。(表1、表2、図4を参照)

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が39.4%、現在が45.4%であり、現在のほうが総合評価の高い者の比率が高かった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が26.7%、現在が23.6%であり、10年前のほうが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 3.18 ± 1.08 点、現在が 3.31 ± 1.10 点であり、現在の児童の平均値が高かった。(表5、表6を参照)

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第2報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルランの記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、柔軟性、敏捷性、全身持久性の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

⑤10歳男子の総合評価の比較

10年前と現在の10歳男子の総合評価の分布をみると、10年前はAが11.3%、Bが25.5%、Cが37.3%、Dが20.7%、Eが5.2%であった。一方、現在はAが17.3%、Bが26.4%、Cが36.0%、Dが16.1%、Eが4.3

%であった。(表1、表2、図5を参照)

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が36.8%、現在が43.7%であり、現在のほうが総合評価の高い者の比率が高かった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が25.9%、現在が20.4%であり、10年前のほうが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 3.17 ± 1.04 点、現在が 3.36 ± 1.07 点であり、現在の児童の平均値が高かった。(表5、表6を参照)

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第2報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルランの記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、柔軟性、敏捷性、全身持久性の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

⑥11歳男子の総合評価の比較

10年前と現在の11歳男子の総合評価の分布をみると、10年前はAが11.3%、Bが32.7%、Cが34.0%、Dが17.1%、Eが5.0%であった。一方、現在はAが14.7%、Bが35.3%、Cが30.2%、Dが17.2%、Eが2.6%であった。(表1、表2、図6を参照)

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が34.0%、現在が50.0%であり、現在のほうが総合評価の高い者の比率が高かった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が22.1%、現在が19.8%であり、10年前のほうが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 3.28 ± 1.03 点、現在が 3.42 ± 1.02 点であり、現在の児童の平均値が高かった。(表5、表6を参照)

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第2報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、反復横とび、20mシャトルラン、50m走の記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、敏捷性、全身持久性、スピード・走能力の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

(2) 10年前と現在の6～11歳女子児童の体力運動能力の総合評価の比較

① 6歳女子の総合評価の比較

10年前と現在の6歳女子の総合評価の分布をみると、10年前はAが6.1%、Bが21.6%、Cが43.2%、Dが19.8%、Eが9.3%であった。一方、現在はAが13.7%、Bが32.2%、Cが36.6%、Dが12.9%、Eが4.6%であった。（表3、表4、図7を参照）

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が27.7%、現在が45.9%であり、現在のほうが総合評価の高い者の比率が高かった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が29.1%、現在が17.5%であり、10年前のほうが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 2.95 ± 0.84 点、現在が 3.37 ± 1.02 点であり、現在の児童の平均値が高かった。（表5、表6を参照）

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第1報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走の記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、柔軟性、敏捷性、全身持久性、スピード・走能力の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

② 7歳女子の総合評価の比較

10年前と現在の7歳女子の総合評価の分布をみると、10年前はAが6.8%、Bが21.4%、Cが41.9%、Dが24.3%、Eが5.7%であった。一方、現在はAが11.4%、Bが27.7%、Cが42.1%、Dが17.0%、Eが1.8%であった。（表3、表4、図8を参照）

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が28.2%、現在が39.1%であり、現在のほうが総合評価の高い者の比率が高かった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が30.0%、現在が18.8%であり、10年前のほうが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 2.99 ± 0.98 点、現在が 3.30 ± 0.94 点であり、現在

の児童の平均値が高かった。（表5、表6を参照）

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第1報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走の記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、柔軟性、敏捷性、全身持久性、スピード・走能力の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

③ 8歳女子の総合評価の比較

10年前と現在の8歳女子の総合評価の分布をみると、10年前はAが8.0%、Bが27.5%、Cが37.5%、Dが21.9%、Eが5.1%であった。一方、現在はAが14.0%、Bが34.1%、Cが34.8%、Dが15.3%、Eが1.8%であった。（表3、表4、図9を参照）

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が35.5%、現在が48.1%であり、現在のほうが総合評価の高い者の比率が高かった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が27.0%、現在が17.1%であり、10年前のほうが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 3.11 ± 1.00 点、現在が 3.43 ± 0.97 点であり、現在の児童の平均値が高かった。（表5、表6を参照）

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第1報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走、立ち幅とびの記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、柔軟性、敏捷性、全身持久性、スピード・走能力、瞬発力・跳能力の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

④ 9歳女子の総合評価の比較

10年前と現在の9歳女子の総合評価の分布をみると、10年前はAが10.7%、Bが27.4%、Cが35.6%、Dが19.8%、Eが6.6%であった。一方、現在はAが14.6%、Bが32.8%、Cが34.8%、Dが15.9%、Eが1.9%であった。（表3、表4、図10を参照）

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が38.1%、現在が47.4%であり、現在のほうが総合評価の高い者の比率が高かった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が26.4%、現在が17.8%であり、10年前のほうが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 3.16 ± 1.07 点、現在が 3.42 ± 0.98 点であり、現在の児童の平均値が高かった。(表5、表6を参照)

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第2報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルランの記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、柔軟性、敏捷性、全身持久性の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

⑤10歳女子の総合評価の比較

10年前と現在の10歳女子の総合評価の分布をみると、10年前はAが13.2%、Bが26.7%、Cが40.0%、Dが17.0%、Eが3.0%であった。一方、現在はAが19.9%、Bが31.3%、Cが33.9%、Dが13.4%、Eが1.5%であった。(表3、表4、図11を参照)

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が39.9%、現在が51.2%であり、現在のほうが総合評価の高い者の比率が高かった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が20.0%、現在が14.9%であり、10年前のほうが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 3.30 ± 1.00 点、現在が 3.55 ± 1.00 点であり、現在の児童の平均値が高かった。(表5、表6を参照)

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第2報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルランの記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、柔軟性、敏捷性、全身持久性の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

⑥11歳女子の総合評価の比較

10年前と現在の11歳女子の総合評価の分布をみると、10年前はAが12.8%、Bが33.4%、Cが32.5%、Dが18.3%、Eが3.0%であった。一方、現在はAが

17.4%、Bが34.3%、Cが32.1%、Dが14.4%、Eが1.8%であった。(表3、表4、図12を参照)

AまたはBと総合評価の高かった児童の比率は10年前が46.2%、現在が51.7%であり、現在のほうが総合評価の高い者の比率が高かった。

DまたはEと総合評価の低かった児童の比率は10年前が21.3%、現在が16.2%であり、10年前のほうが総合評価の低い者の比率が高かった。

総合評価をA：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点に換算して平均値を算出し、10年前と現在の児童の平均値を比較すると、10年前が 3.35 ± 1.02 点、現在が 3.51 ± 1.00 点であり、現在の児童の平均値が高かった。(表5、表6を参照)

このように、10年前に比べて現在の総合評価が高い傾向にあったが、第2報でも述べたように8つの測定項目のうち、上体おこし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走の記録の伸び、すなわち筋力・筋持久力、柔軟性、敏捷性、全身持久性、スピード・走能力の成績が良くなったことが総合評価の向上につながっているものと思われる。

(3) 総合評価が高かった児童の比率の年齢間および男女の比較

10年前の男子児童でAまたはBと総合評価の高かった者の比率を年齢間で比較すると、9歳が39.4%と最も高く、以下10歳が36.8%、8歳が35.9%、11歳が34.0%、7歳が31.7%と続き、6歳が31.0%と最も低かった。一方、現在の男子児童では11歳が50.0%と最も高く、以下8歳が47.3%、9歳が45.4%、10歳が43.7%、6歳が42.2%と続き、7歳が31.9%と最も低かった。(表1、表2を参照)

10年前の女子児童でAまたはBと総合評価の高かった者の比率は11歳が46.2%と最も高く、以下10歳が39.9%、9歳が38.1%、8歳が35.5%、7歳が28.2%と続き、6歳が27.7%と最も低かった。一方、現在の女子児童では11歳が51.7%と最も高く、以下10歳が51.2%、8歳が48.1%、9歳が47.4%、6歳が45.9%と続き、7歳が39.1%と最も低かった。(表3、表4を参照)

このように、男女とも6～7歳の児童で総合評価の高い者の比率が6つの年齢段階の中で5～6番目と低い傾向にあることがわかった。また、現在の児童に限ると男女とも総合評価の高い者の比

率が11歳で最も高いことがわかった。男女を比較すると、10年前の6～7歳では男子が、8～11歳では女子が、現在では女子が6～11歳のすべてで総合評価の高い者の比率が高いことがわかった。

(4) 総合評価が低かった児童の比率の年齢間および男女間の比較

10年前の男子児童でDまたはEと総合評価の低かった者の比率を年齢間で比較すると、7歳が31.9%と最も高く、以下6歳が28.8%、8歳が26.9%、9歳が26.7%、10歳が25.9%と続き、11歳が22.1%と最も低かった。一方、現在の男子児童では7歳が26.2%と最も高く、以下9歳が23.6%、6歳が21.0%、10歳が20.4%、11歳が19.8%と続き、8歳が19.1%と最も低かった。（表1、表2を参照）

10年前の女子児童でDまたはEと総合評価の低かった者の比率は7歳が30.0%と最も高く、以下6歳が29.1%、8歳が27.0%、9歳が26.4%、11歳が21.3%と続き、10歳が20.0%と最も低かった。一方、現在の女子児童では7歳が18.8%と最も高く、以下9歳が17.8%、6歳が17.5%、8歳が17.1%、11歳が16.2%と続き、10歳が14.9%と最も低かった。（表3、表4を参照）

このように、10年前の男女、現在の男女のいずれも7歳の児童で総合評価の低い者の比率が6つの年齢段階の中で最も高く、逆に10～11歳の児童ではその比率が低い傾向にあることがわかった。また、男女を比較すると、現在の女子では6つすべての年齢段階で総合評価の低い者の比率が男子よりも低いことがわかった。

(5) 男女の総合評価の平均値の比較

10年前の6～11歳児童の総合評価の平均値を男女で比較すると、6歳では男子が 2.99 ± 1.03 点、女子が 2.95 ± 0.84 点、7歳では男子が 3.02 ± 1.02 点、女子が 2.99 ± 0.98 点、8歳では男子が 3.15 ± 1.04 点、女子が 3.11 ± 1.00 点、9歳では男子が 3.18 ± 1.08 点、女子が 3.16 ± 1.07 点、10歳では男子が 3.17 ± 1.04 点、女子が 3.30 ± 1.00 点、11歳では男子が 3.28 ± 1.03 点、女子が 3.35 ± 1.02 点であった。（表5、表6を参照）

現在の6～11歳児童の総合評価の平均値を男女で比較すると、6歳では男子が 3.28 ± 1.02 点、女子が 3.37 ± 1.02 点、7歳では男子が 3.13 ± 1.00 点、女子が 3.30 ± 0.94 点、8歳では男子が 3.40 ± 1.05

点、女子が 3.43 ± 0.97 点、9歳では男子が 3.31 ± 1.10 点、女子が 3.42 ± 0.98 点、10歳では男子が 3.36 ± 1.07 点、女子が 3.55 ± 1.00 点、11歳では男子が 3.42 ± 1.02 点、女子が 3.51 ± 1.00 点であった。（表5、表6を参照）

このように、10年前の児童の総合評価は6～9歳では男子の平均値が高く、10～11歳では女子の平均値が高かったが、10歳のみ男女で統計的な有意差が認められた。一方、現在の児童ではすべての年齢段階で女子の平均値が高く、7歳、9歳、10歳、11歳と4つの年齢段階で統計的な有意差が認められ、近年の傾向として男女の平均値の差が広がり、女子で総合成績の向上が顕著になっているように思われた。

(6) 児童の体力・運動能力の向上の背景

6～11歳男女児童の総合評価の分析を通して、10年前に比べて現在の児童のほうがAまたはBと総合評価が高い児童の比率が高く、逆にDまたはCと総合評価の低い児童の比率が低く、また総合評価の平均値も10年前に比べて現在の児童のほうが高い傾向にあり、この10年間に児童の体力・運動能力が向上していることが明らかになった。第1報および第2報でも述べたが、児童の体力・運動能力が向上の背景には、学校内での運動時間の確保⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾、様々な種類の運動への挑戦⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾、地域での運動に関わる活動の奨励⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾など、児童の運動能力の低下に歯止めをかけ、体力や運動能力の向上を目指した学校内外での様々な取り組みの成果が出てきているのではないかと思われた。近年、子どもの体力向上実践事業⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾、トップアスリート派遣指導事業⁽²⁰⁾⁽²¹⁾、全国体力・運動能力・運動習慣等調査に基づく子どもの体力向上支援事業⁽²²⁾など、文部科学省が中心になって、子どもの体力・運動能力を向上させるための事業が全国各地で積極的に行われるようになり、徐々にではあるが、子どもの運動習慣、生活習慣の改善や体力の向上が図られ、成果が出てきているように思われた。

今後さらに、全国の家・地域・学校で子どもの体力・運動能力を向上させるための活動に積極的に取り組んでいくとともに、運動実践だけでなく、質の良い睡眠やバランスのとれた食事をはじめとした健康生活全般を良いものにしていくため

の活動にも積極的に取り組み、子どもの健全な発
育発達ならびに健康増進が保障されていくことが

きわめて重要だと思われた。

図1. 6歳男子児童の総合評価の分布

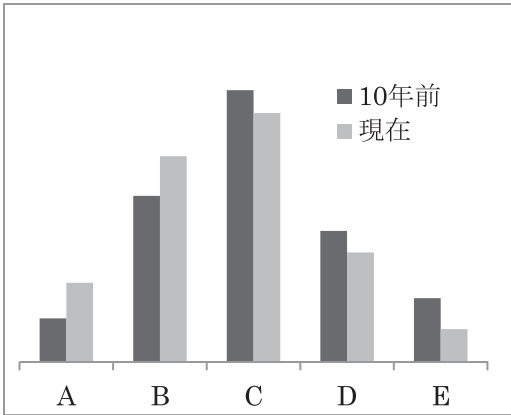


図2. 7歳男子児童の総合評価の分布

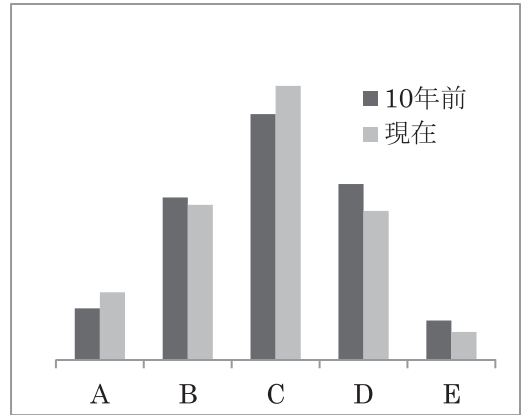


図3. 8歳男子児童の総合評価の分布

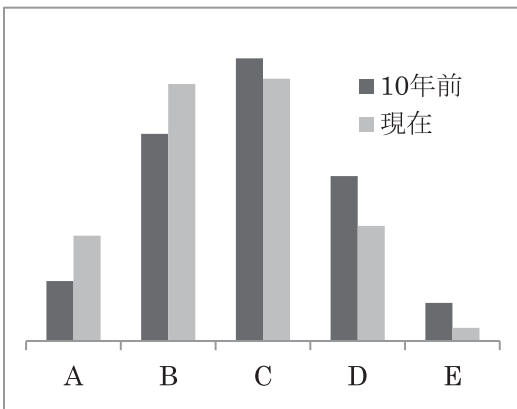


図4. 9歳男子児童の総合評価の分布

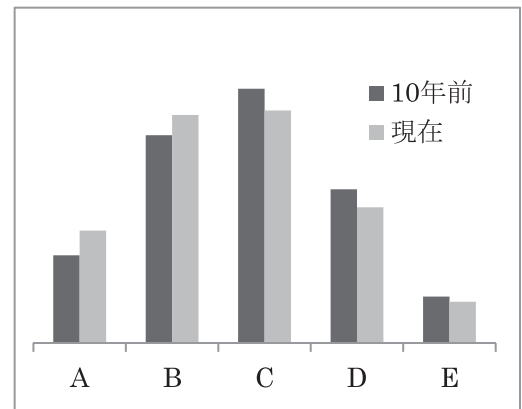


図5. 10歳男子児童の総合評価の分布

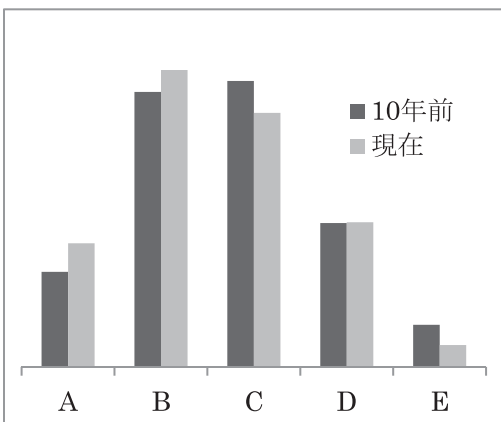


図6. 11歳男子児童の総合評価の分布

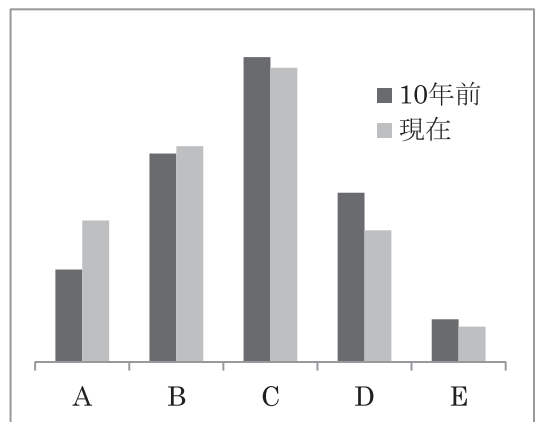


図7. 6歳女子児童の総合評価の分布

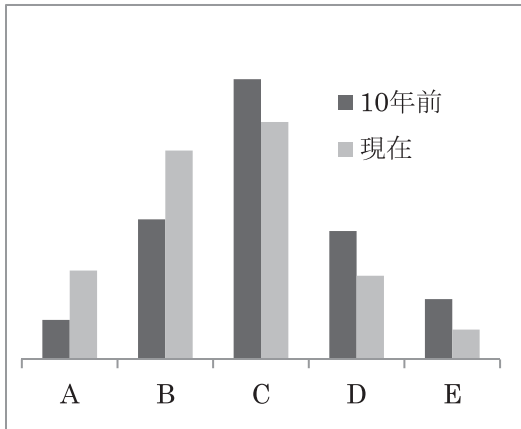


図8. 7歳女子児童の総合評価の分布

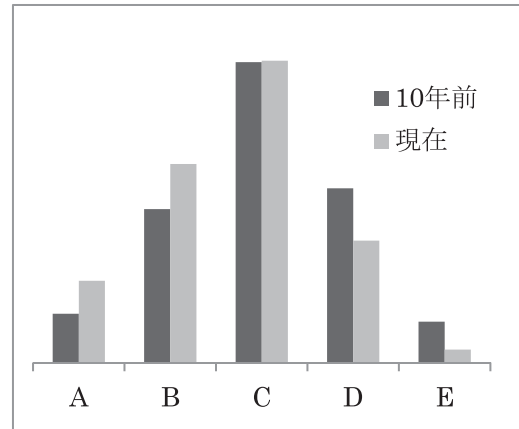


図9. 8歳女子児童の総合評価の分布

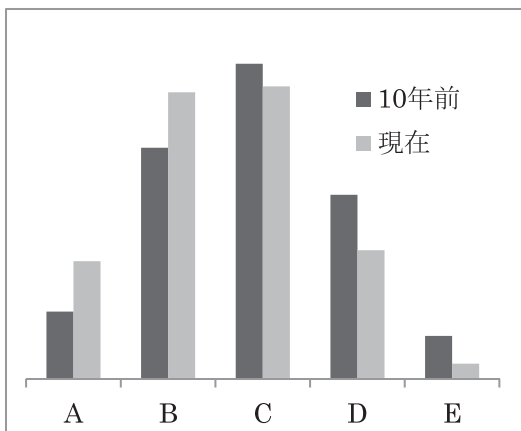


図10. 9歳女子児童の総合評価の分布

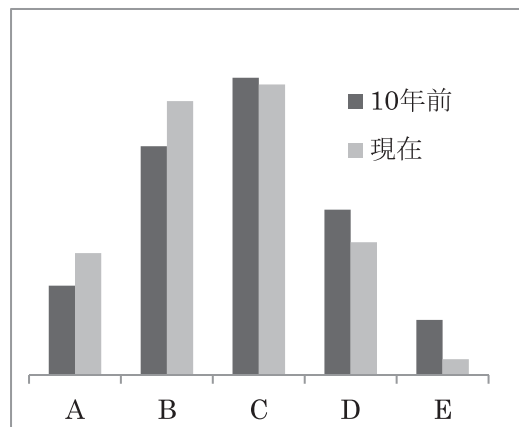


図11. 10歳女子児童の総合評価の分布

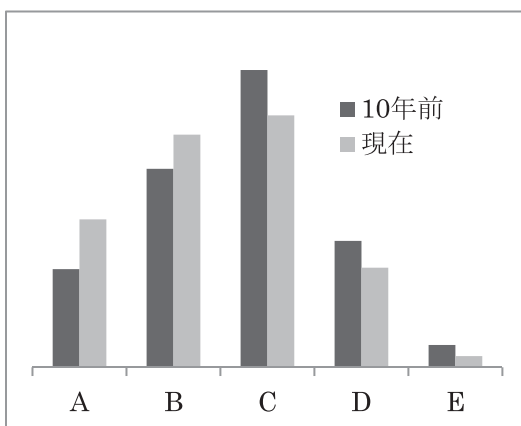


図12. 11歳女子児童の総合評価の分布

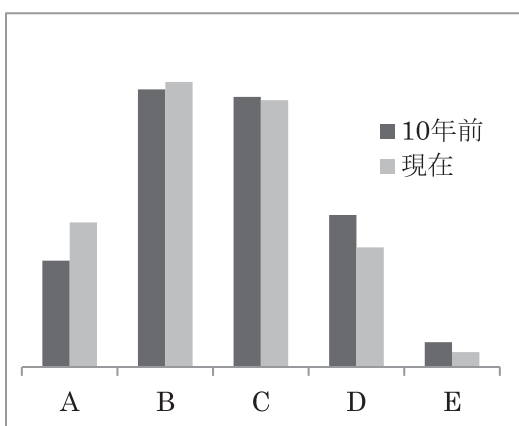


表1. 10年前の6～11歳男子児童の体力・運動能力の総合評価の分布

年齢	A		B		C		D		E		合計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
6	64	6.4	246	24.6	404	40.3	194	19.4	94	9.4	1002	100.0
7	80	7.6	254	24.1	385	36.5	275	26.1	61	5.8	1055	100.0
8	116	10.9	266	25.0	397	37.3	233	21.9	53	5.0	1065	100.0
9	122	11.7	289	27.7	354	33.9	214	20.5	65	6.2	1044	100.0
10	118	11.3	267	25.5	391	37.3	217	20.7	54	5.2	1047	100.0
11	120	11.3	349	32.7	363	34.0	183	17.1	53	5.0	1068	100.0

表2. 現在の6～11歳男子児童の体力・運動能力の総合評価の分布

年齢	A		B		C		D		E		合計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
6	121	11.7	315	30.5	381	36.9	167	16.2	50	4.8	1034	100.0
7	99	10.0	228	23.0	403	40.7	219	22.1	41	4.1	990	100.0
8	165	15.8	328	31.5	351	33.7	157	15.1	42	4.0	1043	100.0
9	158	15.0	321	30.4	327	31.0	191	18.1	58	5.5	1055	100.0
10	179	17.3	273	26.4	372	36.0	166	16.1	44	4.3	1034	100.0
11	151	14.7	362	35.3	309	30.2	176	17.2	27	2.6	1025	100.0

表3. 10年前の6～11歳女子児童の体力・運動能力の総合評価の分布

年齢	A		B		C		D		E		合計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
6	62	6.1	219	21.6	438	43.2	201	19.8	94	9.3	1014	100.0
7	71	6.8	223	21.4	437	41.9	253	24.3	59	5.7	1043	100.0
8	83	8.0	285	27.5	389	37.5	227	21.9	53	5.1	1037	100.0
9	111	10.7	284	27.4	369	35.6	205	19.8	68	6.6	1037	100.0
10	135	13.2	273	26.7	409	40.0	174	17.0	31	3.0	1022	100.0
11	136	12.8	354	33.4	345	32.5	194	18.3	32	3.0	1061	100.0

表4. 現在の6～11歳女子児童の体力・運動能力の総合評価の分布

年齢	A		B		C		D		E		合計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
6	128	13.7	301	32.2	342	36.6	121	12.9	43	4.6	935	100.0
7	107	11.4	260	27.7	395	42.1	159	17.0	17	1.8	938	100.0
8	137	14.0	333	34.1	340	34.8	149	15.3	18	1.8	977	100.0
9	146	14.6	329	32.8	349	34.8	159	15.9	19	1.9	1002	100.0
10	200	19.9	314	31.3	340	33.9	134	13.4	15	1.5	1003	100.0
11	178	17.4	350	34.3	328	32.1	147	14.4	18	1.8	1021	100.0

表5. 10年前の6～11歳男女の体力・運動能力の総合評価の平均値の比較

年齢	男子		女子	
	平均値	人数	平均値	人数
6	2.99±1.03	1002	2.95±0.84	1014
7	3.02±1.02	1055	2.99±0.98	1043
8	3.15±1.04	1065	3.11±1.00	1037
9	3.18±1.08	1044	3.16±1.07	1037
10	3.17±1.04	1047	3.30±1.00	1022
11	3.28±1.03	1068	3.35±1.02	1061

※平均値は、A：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点として算出

表6. 現在の6～11歳男女の体力・運動能力の総合評価の平均値の比較

年齢	男子		女子	
	平均値	人数	平均値	人数
6	3.28±1.02	1034	3.37±1.02	935
7	3.13±1.00	990	3.30±0.94	938
8	3.40±1.05	1043	3.43±0.97	977
9	3.31±1.10	1055	3.42±0.98	1002
10	3.36±1.07	1034	3.55±1.00	1003
11	3.42±1.02	1025	3.51±1.00	1021

※平均値は、A：5点、B：4点、C：3点、D：2点、E：1点として算出

4. まとめ

10年前と現在の6～11歳児童の体力・運動能力の総合評価の分布ならびに平均値の比較を通して、次のようなことが明らかになった。

- 1) 10年前に比べて現在の児童のほうが、6～11歳のすべての年齢段階で男女とも、総合評価がA・Bと高い傾向にある者の比率が高く、逆に総合評価がD・Eと低い傾向にある者の比率は低いことがわかった。
- 2) 10年前に比べて現在の児童のほうが、6～11歳のすべての年齢段階で男女とも、総合評価の平均値が高いことがわかった。
- 3) 男女とも6～7歳の児童で総合評価の高い者の比率が6つの年齢段階の中で5～6番目と低い傾向にあることがわかった。また、現在の児童に限ると男女とも総合評価の高い者の比率が11歳で最も高いことがわかった。
- 4) 10年前の男女、現在の男女のいずれも7歳の児童で総合評価の低い者の比率が6つの年齢段階の中で最も高く、逆に10～11歳の児童ではその比率が低い傾向にあることがわかった。
- 5) 10年前の児童の総合評価は6～9歳では男子の平均値が高く、10～11歳では女子の平均値が高かった。一方、現在の児童ではすべての年齢段階で女子の平均値が高く、近年の傾向として男女の平均値の差が広がり、女子で総合成績の向上が顕著になっているように思われた。
- 6) 児童の体力・運動能力が向上の背景には、学校内での運動時間の確保、様々な種類の運動への挑戦、地域での運動に関わる活動の奨励など、児童の運動能力の低下に歯止めをかけ、体力や運動能力の向上を目指した学校内外での様々な取り組みの成果が出てきているのではないかと思われた。
- 7) 今後さらに、全国的家庭・地域・学校で子どもの体力・運動能力を向上させるための活動に積極的に取り組んでいくとともに、運動実践だけでなく、質の良い睡眠やバランスのとれた食事をはじめとした健康生活全般を良いものにしていくための活動にも積極的に取り組み、子どもの健全な発育発達ならびに健康増進が保障されていくことがきわめて重要と思われた。

<注>

- 1) 河井克正、澤田孝二：10年前と現在の小学生の体力・運動能力の比較(第1報)－6～8歳児童の調査結果の分析－，山梨学院短期大学研究紀要第37巻，41－52. (2017)
- 2) 河井克正、澤田孝二：10年前と現在の小学生の体力・運動能力の比較(第2報)－9～11歳児童の調査結果の分析－，山梨学院短期大学研究紀要第38巻，49－59. (2018)
- 3) スポーツ庁健康スポーツ課：体力・運動能力調査統計数値表年齢別結果. (2016)
- 4) 福富和夫、永井正規、中村好一、柳川 洋：ヘルスサイエンスのための基本統計学，南山堂，85－99. (1989)
- 5) 福富和夫、永井正規、中村好一、柳川 洋：ヘルスサイエンスのための基本統計学，南山堂，73－84. (1989)
- 6) 鷺野昭久：体力向上に成功した小学校と地域の取り組み，子どもと発育発達第13巻，15－20. (2015)
- 7) 文部科学省：体力・運動能力の高い児童生徒・学校の特徴，平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書，72－73. (2015)
- 8) 文部科学省：体力・運動能力の高い児童生徒・学校の特徴，平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書，74－75. (2015)
- 9) 文部科学省：体力・運動能力の高い児童生徒・学校の特徴，平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書，76－77. (2015)
- 10) 山本松宏：気力・体力・生きる力を育もう、学校・家庭・地域で－新城市4小学校の取り組み－，子どもと発育発達第4巻，91－94. (2006)
- 11) 我妻敬一：子どもの体力向上実践事業－宮崎県大郷町の取り組み実践例－，子どもと発育発達第4巻，99－104. (2006)
- 12) 川嶋 歩：埼玉県八潮市の実践について，子どもと発育発達第4巻，105－107. (2006)
- 13) 末成まどか：健やかな体力づくりに励む子どもの育成－実践意欲の向上をめざした取り組み，子どもと発育発達第4巻，111－114. (2006)
- 14) 情野 正：学校・家庭・地域の役割を生かした体力づくり，子どもと発育発達第4巻，95－104. (2006)
- 15) 文部科学省：体力・運動能力の高い児童生徒・学校の特徴，平成27年度全国体力・運動能力、運動習

慣等調査報告書，70－71. (2015)

- 16) 文部科学省：体力・運動能力の高い児童生徒・学校の特徴，平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書，74－75. (2015)
- 17) 関 伸夫：子どもの体力低下に対する国の取組み－体力向上の取組みと子どもの変化－，子どもと発育発達第7巻，171－175. (2009)
- 18) 小林寛道：子どもにとっての地域とは，子どもと発育発達第4巻，82－85. (2006)
- 19) 小澤治夫：地域における大学の取り組み，子どもと発育発達第2巻，299－302. (2004)
- 20) 関 伸夫：子どもの体力低下に対する国の取組み－体力向上の取組みと子どもの変化－，子どもと発育発達第7巻，171－175. (2009)
- 21) 日比野幹生：子どもの体力向上に向けた国の取り組み，子どもと発育発達第2巻，308－314. (2004)
- 22) 関 伸夫：子どもの体力低下に対する国の取組み－体力向上の取組みと子どもの変化－，子どもと発育発達第7巻，171－175. (2009)

<参考文献>

- ・文部科学省：運動やスポーツへの意識の高い児童生徒・学校の特徴，平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書，22－41. (2015)
- ・文部科学省：運動時間の長い児童生徒・学校の特徴，平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書，42－61. (2015)
- ・文部科学省：体力・運動能力の高い児童生徒・学校の特徴，平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書，62－83. (2015)
- ・伊藤静夫、森丘保典、青野 博：子どもの運動能力の年代比較，体育の科学第61巻，164－170. (2011)
- ・三村憲一、白井達矢、山口晃平、持田 師：小学生の体力・運動能力と睡眠時間に関する一考察，大阪教育大学紀要第IV部門第61巻，263－270. (2012)
- ・上地広昭、中村菜々子、竹中晃二：子どもにおける身体活動の決定要因に関する研究，健康心理学研究第15巻，29－38. (2002)
- ・真家英俊：小学生における体格と運動能力との関係に関する横断的調査，東京未来大学研究紀要第6巻，153－163. (2013)
- ・若吉浩二、高橋豪仁、今枝和与、岸田 悟、長谷川芳彦、石川元美、田辺正友：小学生児童における運

- 動能力・運動習慣の経年的変化—スポーツ教室開催の影響—, 奈良教育大学紀要第54巻, 39-48. (2005)
- 山下玲香、都築繁幸、石川 恭：子どもの運動意識とそれに及ぼす男女差及び学年差の影響, 発育発達研究第71号, 1-8. (2016)
 - 與儀幸朝、國土奨平：小学生の体力・運動能力における時代コントラストの検討, 発育発達研究第69号, 1-13. (2015)
 - 内藤久士：最近30年の子どもの体力・運動能力の特徴, 体力科学第53巻, 33. (2004)
 - 是枝喜代治：運動が子どもの発育発達に及ぼす影響, 体育科教育第50巻, 14-17. (2002)
 - 有川秀之：子どもの走力の発達, 子どもと発育発達第12巻, 8-15. (2014)
 - 國土奨平：子どもの跳躍力の発達, 子どもと発育発達第12巻, 16-22. (2014)
 - 櫻井伸二：子どもの投能力と投動作の発達, 子どもと発育発達第12巻, 23-29. (2014)
 - 新本惣一郎、山崎昌廣：小学生の体力と身体活動量の関係, 発育発達研究第61号, 9-18. (2013)
 - 藤井勝紀：子どもの体力と生活, 子どもと発育発達第6巻, 87-93. (2008)
 - 宮下充正：子どもの身体活動能力と教育, 子どもと発育発達第4巻, 45-51. (2006)
 - 西嶋尚彦：子どもの運動能力指標, 子どもと発育発達第3巻, 70-74. (2005)
 - 高松 薫：子どもにとっての体力・運動能力とトレーニング, 子どもと発育発達第3巻, 89-93. (2005)
 - 小林寛道：子どもの体力向上の年齢段階, 子どもと発育発達第2巻, 276-280. (2004)
 - 鈴木大地：子どものスポーツ習慣, 子どもと発育発達第2巻, 293-298. (2004)
 - 西嶋尚彦：子どもの体力の現状, 子どもと発育発達第1巻, 13-22. (2003)